

# 芝居の夏

二川清

以前講師としておられた二村先生の響にならって、近頃の芝居の噂で編集部からのご依頼に対する責をふさぐこととする。

以前は夏、特に八月には、大劇場特に歌舞伎座では歌舞伎の本興行はなく、流行歌手の大衆演劇などがかり、一方国立劇場では、若手役者の勉強芝居や、大部屋の人たちが主役を勤める短期間の芝居が中心であった。

ところが、近年また幾分様子が変化して、歌舞伎座でも本興行が持たれ、国立劇場では、中堅というよりはもはやベテランというべき俳優たち、すなわち宗十郎の古典復活の会、富十郎の矢車会などの自主公演も見られるようになった。若手の勉強会も、以前は役者の自主公演の色彩が濃かったのだが、近年は国立劇場の主催となって日数も増え、大部屋の

人達の芝居も、まだ役者になりたての連中から十何年選手まで含む稚魚の会と、ベテランの大部屋役者中心の歌舞伎会とがあつて、稚魚の会は公演日数も増加している。

したがって例月だとせいぜい二、三回で済む歌舞伎小屋巡りが、八月ばかりは七、八回にも増えてしまう。とても全部は回りきれないくらいである。それで、これらの中から目ぼしいものを取り上げてみることにする。

八月の芝居の中で一番の楽しみは、何と言っても宗十郎の古典復活の会である。三年前の「うわばみお由」を第一回として、「紅皿欠皿」「女大盃」と、歌舞伎観劇歴五十年になる私でさえ始めてお目にかかる狂言ばかり、今度の「鬼神のお松」も宗十郎としては二度目とはいえ、ほぼ三〇年前の昭和三九年以来

であり、珍しい演目であることに変わりはない。しかも成駒屋や音羽屋の女形芸とは違って、粹で伝法な味の女形に特徴を見せる紀の国屋の芸風を存分に発揮できる狂言ばかりである。今度の「鬼神のお松」も期待にそむかず、夫のために心を尽くす女の哀れと、大の男達を従えた盗賊の頭としての伝法さを見事に仕分けている。又よき共演者としての田之助の存在も忘れることはできない。この人がいなくなったら、この会の魅力もかなり削られることとなろう。

つぎに興味をそそるのは、成駒屋系の大部屋役者で大ベテランの歌江を中心とした歌舞伎会であろう。ここでも宗十郎の会と同様に珍しい演目が毎回歌舞伎好きを楽しませてくれる。昨年の黙阿弥の「白浪五人女」を始め、

「敷島怪談」、「女団七」、「志度寺」など、珍しいものばかりで、今年の「傾城重の井」など珍品中の珍品といえよう。これらの、明治期や大正期でさえ、中芝居以下でしか見るこののできなかった狂言、九代目団十郎、五代目菊五郎系統のお上品趣味の大劇場興行では殆ど見ることができなかった芝居を、今の時代に楽しめるのは全く宗十郎と歌江のおかげである。どちらかというと、伝法な味よりは、女としての真実の表現に優れる歌江としては、今度の重の井はまさに適り役といえた。ここでもよき共演者としての幸右衛門の練達の芸を贅えずにはいられない。今年はこちらと脇へ回って、いい敵役ぶりをみせていたが、やはりこの人も歌舞伎会にはなくてはならない存在といえよう。

昨年から、八月の自主公演に富十郎の矢車会も加わった。これは宗十郎の場合とは違って、どちらかというと踊中心で、昨年など芝居は皆無であったが、今年は、富十郎としては初役の筆屋幸兵衛すなわち「水天宮利生深川」が演じられた。今年もこれ以外の五本の出し物はすべて舞踊で、その意味では歌舞伎好きとしては不満があり、特に兼ねる役者として、また当代最高の歌舞伎技術の持ち主の

一人である富十郎の芝居が六つの演目の中の一つというのは物足りない。しかしその筆屋幸兵衛は絶品といえた。前半の零落した武士としての格調と哀れ深い台詞まわしの味わい、後半の狂気の凄みと迫真はやはりこういう役でも第一人者であることを示した。このあと、「娘道成寺」を道行から押戻までたぶぶり演じたが、筆幸で集中的な芝居をしたあと道成寺ではきつかるうと同情した。十数年も前になるが、富十郎襲名の時の気力充溢ぶりには当然のことながら及ばない。

歌舞伎座では、八月としては珍しい本興行を持った。昨年も若手中心の短期間の興行をかけたが、出し物も夏芝居らしい肩の凝らない物ばかりであった。しかし今年は、やはり若手中心は変わらないものの、二五日間の興行でしかも演目も「義経千本桜」の通しというどっしりした据え方である。人氣もいまや上々の勘九郎、八十助、橋之助、新福助といった花形が顔を揃え、勘九郎は初役の権太、

道行の静、四の切の義経、八十助は二、四段目の忠信をやはり初役で、二段目の知盛は二度目の橋之助、典侍の局、お里は福助がやはり二度目で勤めるというかなり魅力的な配役である。中では二段目の八十助の狐忠信の荒

事が爽快で、富十郎の絶品のそれに大して見劣りしなかったのは立派である。四の切の忠信も、きちんとした手順、格調の高さ、それに哀れも十分で、これまで見た誰のよりも気に入った。勘九郎の権太も、父の勘三郎よりむしろ六代目菊五郎の傍があり、台詞の調子も六代目を偲ばせるところがあって上出来である。東京の役者が演ずる場合は全部そうだが、音羽屋系の江戸っ子権太で、義太夫狂言の味には乏しいが、今度の勘九郎はその不満を余り感じさせなかった。福助の典侍の局も品格もあって歌右衛門のよき影響を感じさせ、橋之助の知盛も前回よりは進歩していて、全体としては面白い千本桜といえた。

この他智太郎初役の「宿無団七」や稚魚の会もあってともかく忙しい芝居ではあった。